

北海道集落総合対策モデル事業（母子里地区地域づくり協議会）
母子里地区意見交換会～議事要旨～

■開催日時

平成25年11月18日（月） 18:00～20:00

■開催場所

幌加内町母子里コミュニティセンター 研修室

■出席者

<旭川大学>

山内学長、佐々木名誉教授、鎌田（とし子）教授、鎌田（哲宏）教授、大野准教授

<母子里地区>

母子里地区地域づくり協議会委員 4名

母子里地区住民 5名

<NPO法人「よるべさ」>

蔵前理事、小野田理事

<幌加内町>

小野田課長

<上川総合振興局>

畑島課長

<当課>

西田主幹、田中主査

■開催概要

1 開会

西田主幹：ご多忙の中、夜分にもかかわらずお集まりいただき、感謝を申し上げます。

これより、母子里地区意見交換会として進めさせていただくが、本日は、旭川大学より、本年8月に実施された母子里地区にお住まいの全世帯を対象とした生活実態調査の結果についてご報告をいただくこととなっている。さて、道では、本年度より、この母子里地区において、集落対策に関するモデル的な取組を実践する「北海道集落総合対策モデル事業」に取り組んでおり、その一環として、旭川大学の全面的なご協力による生活実態調査が実施されたところ。この調査結果などを踏まえながら、母子里地区の現状や今後の目指すべき姿などについて、皆様から忌憚のないご意見をいただければと考えている。どうぞよろしく願います。

2 議事

(1) 北海道における集落対策の取組について

※西田主幹より、資料1及び2に沿って説明

(2) 母子里集落の維持・再生に関する生活実態調査報告について

山内学長：まずは本校の調査にご協力をいただき、心よりお礼申し上げます。先日の収穫祭では、本校の学生たちに「きのこ汁」を振る舞っていただくなど、学生たちも非常に喜んでおり、今後も機会があれば、是非参加したいという学生も多い。皆様の暖かい歓迎に対し、深く感謝申し上げます次第。また、その後、母子里の老人クラブの方々が本校にお越しになり、「イトウ」の養殖のお話などを詳しくお教えいただきました。先月、福島郡山に赴く機会があったが、福島に住んでいる被災されたお年寄りのお話を聞いたところ、「私たちは天国はいらない。故郷だけがほしい。」ということであった。これは大変痛ましいことである。今回の調査でも住民の8割以上が「住み続けたい」というお考えをお持ちであり、福島のお年寄りの方々のお気持ちと通ずるものがあるように思える。本日は、調査に当たった鎌田とし子教授、鎌田哲宏教授、佐々木悟名誉教授、大野剛准教授の全員でこちらに伺ったところであるが、皆様からお聞きした内容を取りまとめ、報告させていただくが、皆様の今後の話し合いの一助となればと考えている。また、先日、知事との懇談会があり、知事公館に伺う機会があったが、知事より感謝のお言葉をいただきました。私からは、道の財政が厳しい中で、集落対策に真剣になって取り組んでいることに対して敬意を表したところ。そのような中、本校としても、今後とも、道と一体となって取り組んで参る考えであるので、よろしくお願いする。

<母子里集落の維持・再生に関する生活実態調査報告書の説明>

各研究分野の担当教授より資料3に沿って説明

(意見交換会において、個人情報特定される記述への配慮などが求められたため、公表用の資料3は修正しています。)

- I 調査の目的と方法
～ 鎌田（哲宏）教授
- II 母子里の社会的性格
～ 鎌田（哲宏）教授
- III 母子里集落の社会関係
～ 大野准教授
- IV 母子里集落における交通と購買行動
～ 佐々木名誉教授
- V 母子里住民の生活の実態
～ 鎌田（とし子）教授
- VI 総括：アイデンティティとしての「母子里」
～ 大野准教授

(3) 意見交換

西田主幹：母子里地区にお住まいの全世帯を対象とした生活実態調査の結果について、この調査に当たられた旭川大学の各先生よりご報告をいただいたところであるが、本調査は聞き取りにより実施され、皆様よりお聞きした内容をもとに、専門的なお立場から詳細に分析いただいたものであり、皆様が普段から感じている事など、調査結果の中に、しっかりと反映されているのではないかと感じているところ。この後は、お集まりの皆様から、今後、母子里に何が必要なのか、また、そのためにはどういった取組が必要なのかなど、色々のご意見をいただければと考えている。ただ今、旭川大学からご報告のあった調査結果の主なポイントとして、まず、ご家族やご近所の方々との関係といった面では、離れて暮らしているご家族との関係が疎遠となっている一方で、地域内における住民の方々同士の繋がりが強く、地域活動にも積極的に参加されている状況が窺えるとの事であった。また、交通の面では、かなり高齢の方でも運転されるケースが多く、今後、運転が難しくなった場合の問題なども指摘されたほか、買い物では、現在、移動スーパーを利用されている方は少ないが、今後、運転が難しくなった場合など、こうしたサービスを利用する方が増えてくることも想定されるので、移動スーパーの充実や地元での店舗展開といった取組も必要ではないかのご指摘もあったところ。また、雇用の面では、働ける場所が確保されれば、働きたいと考えている方が多いほか、ボランティア活動に積極的に参加したいと考えている方も少なからずいるとの事であった。これらの点を踏まえ、皆様より、忌憚のないご意見をいただきたい。

多田会長（協議会）：今後、地域をどのようにしていくかを考えていく上で、実際に住んでいる皆様のご意見など貴重なデータも多く、また、今後の取組のヒントとなるご提案もいただくなど、我々にとっても非常に参考となる調査結果であったと思う。ただし、個人情報が多く含まれているため、データの取り扱いに当たっては、十分に配慮されるようお願いしたい。個人名は伏せているが、母子里は集落の人口も少ないことから、誰が何を話したのかが容易に特定できる設問も多いように思われる。集落内の人間関係など、かなり踏み込んだ形での設問も多かったように思うが、率直に言って、そこまで必要であったのか疑問を感じているところ。

大野准教授：集落内の人間関係については、私が担当させていただいたが、個々人がどのような繋がりの中で暮らしているのかを考えていくことは、今後、具体的な対策を検討していく中で非常に重要な要素であると考えている。例えば、岩手県の被災地で調査をした経緯があるが、安否確認を例に挙げると、個々人の繋がりをしっかりと把握しなければ、具体的な対策が打てないといった問題が生じることとなる。こうした点を踏まえ、本日の調査報告では、集落内の人間関係など個々人の繋がりについて、少し踏み込んだ形でお示しさせていただいたが、データの取り扱いには十分に配慮していきたい。

山内学長：多田会長からご指摘のあった点については、集落内における人間関係への影響に配慮した上でのご発言であったと理解する。そうした点でも、この母子里の人間関係の深さが窺える。調査結果にもあるが、集落の半数が親戚関係にあるほか、友人づきあいの相手方は81%が集落内部の人間関係で占められるなど、日常生活の中で近所に住む身近な他者との信頼関係を築き、親密なネットワークで生活が支えられている実態がある。こうした点を踏まえても、この母子里では、相互扶助の関係が形成・維持されている状況が見受けられ、これらは、今後、この集落を維持していく上でも非常に大切なことであると考えます。

多田会長（協議会）：集落内部の人間関係が親密といった面では、実際のところ、単身世帯の方の不幸があった場合の葬儀のときなど、離れて暮らしているご家族よりも、むしろ、近所の方のほうが、故人の生前のことをよく知っている場合が多いように思われる。

鎌田（とし子）教授：新規参入者を大切にするといった観点も必要である。道内では無医村が多いが、この母子里では医師が1人住んでいるほか、新聞記者経験者や養鶏業者もいる。こうした多様な人材を受け入れ、色々な経験などを学んでいくことも大切である。

日野委員（協議会）：母子里の全体像が解る鳥瞰図のようなものがあれば良い。

大野准教授：熊本大学の徳野教授が提唱されている「T型集落点検」では、地域の貴重な資源や危険箇所、人間関係など、地域の方々の話し合いのもとで1枚の図に落とし込んでいくというもの。今後の検討課題として取り組んでみてもよろしいかと考える。

日野委員（協議会）：今後の話し合いの進め方であるが、産業振興など、それぞれの専門分野に切り分けた議論も必要ではないかと考える。例えば、現在名寄にある北部山林の拠点をもつ母子里に移すといった大きな問題についても検討してみてもどうか。平成元年ころに一度、役場を中心に話があったが、色々問題もあり頓挫している。また、「よるべさ」の活動についてであるが、母子里にあるコミュニティセンターを付帯的な拠点施設として活用し、効果的に使えるような形を検討してみてもどうかと考える。

鎌田（とし子）教授：「よるべさ」の活動の充実については、今回の調査報告の中でも提案させていただいたが、そこで働く方々は、地域外からはなかなか人材が集まらないのが現状であるため、地域内で人材を育てていくことも必要である。

西田主幹：北大演習林との関わりといった面では、次回の地域協議会で、北大演習林の関係者の方にもお越し願って、色々ご議論をいただければと考えている。ま

た、母子里では、今後、高齢化の問題も深刻な状況にあることが想定されるが、先ほどよりご指摘のあったとおり、「よるべさ」の活動が期待される場所であるかと考える。本日は「よるべさ」の関係者の方にもお越しいただいているので、お話いただける範囲内で差し支えないので、ご発言をお願いしたい。

蔵前理事（よるべさ）：母子里のコミュニティセンターで老人クラブが活動しているが、過去に、その老人クラブの活動に合わせて、「よるべさ」のスタッフがこちらに出向き活動していた経緯があるが、その後、当施設のスタッフ数の問題や、介護度の高い高齢者が増えてきたことなどから、日々の業務に追われ、その活動が難しい状況となっているのが現状である。いずれにしても、スタッフの数が少ないことから、大がかりな取組は難しいかと思うが、可能な範囲で関わりを持っていきたいと考えている。先ほど、ボランティア活動に積極的であるとの調査結果をお聞きしたが、当施設でもボランティア活動への働きかけをしているところ。お話のあったとおり、ボランティア活動に積極的な方はいるが、料理の手伝いなどのちょっとした活動でも、実際には、二の足を踏んでいる方が多いのが現状である。

西田主幹：「よるべさ」の活動については、次回の地域協議会で、関係者の方にお越し願ひ、母子里にお住まいの方々との関わり方など、色々ご意見やご提案などをいただければと思う。

若山委員（協議会）：私は外部から母子里に来た者であるので、昔の母子里の栄えていた時期を知らない。昔から母子里で暮らしている方などは、地域が衰退していく経過を知っているだけに、昔の良い時代と比較してしまいがちだが、そもそも昔の良い時代と比較することにあまり意味が無いように思う。現状を率直に受けとめて静かに暮らしていくことが、一番重要なことではないかと考える。昔の良い時代と比較するから、集落を活性化しなければならない、維持しなければならないといった発想が生まれてくる。あるがままを受け入れ、出来る事と、出来ない事をきちんと切り分けて考えていく必要がある。行政にやってもらいたい事があっても、出来ない事もあるということを知ることが重要である。国や道、役場など、行政を頼るのではなく、この地域をどうしたいのか、住民が主体となって考えていくべきであり、その上で、住民自らが出来る事は出来る事として、出来ない事は出来ない事として、きちんと受けとめていくことが大切であり、どの程度で満足できるのか、いわゆる「足るを知る」という意識が大切。道のモデル事業として集落対策に取り組んでいるが、我々の地域のことであるので、まずは住民自らが考えていくことが必要であり、道や旭川大学は、あくまでも側面的なサポート役としての立場で関わっていくべきである。

西田主幹：道の取組を含め、非常に厳しいご意見をいただいたところ。道としても、地域にお住まいの方々が、何を求めているのか、何が出来るのか、地域の方々が主体となって考えていくための場として、この母子里で、地域協議会を設けさせていただいた。道の役割としては、ただ今のご指摘にもあったとおり、地域の方々

の話し合いであるとか、取組であるとか、こうした事がスムーズに進められるよう、あくまでもサポートする立場で関わっていきたいと考えている。

市川氏（母子里住民）：私は、今後50年、100年と母子里を残していきたいと考えている。この地域を存続していくためのひとつの提案として、お年寄りを対象とした施設を設置し、各地にいるお年寄りをこの母子里に集めてはどうか。我々は、この母子里に長年、健康に暮らしている。こうした施設が設置されれば、雇用の場も生まれるので、若い方も集まって来ると思う。

日野委員（協議会）：福祉施設については、過去に、小学校が閉校したときに、閉校後の校舎の利活用などで議論のあったところ。特別養護老人ホームで話が進んだ時期もあったが、最終的には実現できなかった。近隣の市町村でも、福祉施設として活用し、比較的上手くいっている例があると聞いている。福祉をひとつの産業として考えていくことも必要と思われる。

佐々木名誉教授：この母子里で産業をどのようにおこしていくかについて、この調査を通じて、皆様から色々とお話をお聞きしたところ。これまでの母子里の歴史を踏まえると、北大演習林を中心に考えてしまいがちであるが、地域の貴重な資源が意外とあるように思われる。アンケートの結果では、観光の事業化といった点では、冬のスキーや犬ぞり、夏は避暑地として、カヌーや自然を活かしたイベントなど8つの方策が挙げられ、別の観点では、流入人口の確保・増大として、通過する乗用車やバイクのドライバーを母子里で下車させる工夫や、北大の学生と連携した農業ボランティアなど6つの方策が挙げられた。また、産業おこしでは、ソバの加工販売や、地鶏による鶏卵生産の拡大などの提案もあったところ。皆様からお話をお聞きした後に、ソバについて少し調べてみたところ、母子里のソバは、幌加内のブランドとして確立されており、母子里で行われているイベントに由来する「天使の囁き」は、高級ソバとしてかなり流通しており、もうひとつの「母子里の笹ソバ」なども、本州方面で人気を博しているとのことであった。こうした特産品を上手く活用しながら、母子里産のソバとしてブランド化させることを提案したい。

大野准教授：今後、地域協議会の中で、母子里にお住まいの皆様が中心となって話し合いが進められることと思うが、母子里に何が必要で、また、優先度や重要度などを考慮しながら、何を取り組んでいくのかといった点について、現状を踏まえた上で、しっかりと議論していくことが重要である。道のモデル事業では、来年度以降に具体的な取組を進めるとのことであり、旭川大学としても、この母子里で何ができるのかを、住民の皆さんと一緒に考えていきたい。

多田会長（協議会）：今回の調査を通じて、旭川大学から、具体的なアドバイスを色々いただいたので、次回以降の協議会において議論を深めていければとよろしいかと考えている。また、住民の代表を集めた協議会での議論も大事であるが、全

での住民を交えた自治会での議論も大事である。先ほど、地域の資源を上手く活用できないかとのお話があったが、全く同感であり、母子里にお住まいの方で、色々と資格を持っている方がいると聞いているので、そうした方たちの知識や経験を活かしながら、人と人の繋がりが深まっていくような形が望ましい。個々人では出来ない事も、何人か集まれば、出来る事も多くあるので、地域にお住まいの方々の知識や経験を交換しながら、皆で暮らしていくことが大事ではないかと考える。

山内学長： 次の世代に何を残していくのかといった点では、地域の資源や文化などを子供たちにしっかりと受け継いでいくという意識が大事であり、我々も教育者の立場から、本校の学生を含め、皆様と深く関わりを持っていきたいと考えているので、よろしく願います。

～ 以上 ～